

恵比寿映像祭2023

出品作家、上映プログラムなど第3次情報追加発表！



恵比寿映像祭2023 「テクノロジー？」

2023年2月3日(金)～2月19日(日)《15日間》月曜休館

コミッション・プロジェクト (3F展示室) のみ、3月26日(日)まで開催

会場 東京都写真美術館、恵比寿ガーデンプレイス センター広場、地域連携各所ほか

時間 10:00～20:00 (最終日は18:00まで) ※入館は閉館の30分前まで

TOP MUSEUM

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

恵比寿映像祭2023について

アートと映像の表現プラットフォームとして、新たな事業がスタート。
映像文化の創造と紹介・体感の場としてのフェスティバルが、さらに活性化！

恵比寿映像祭では、映像という言葉に限定的に用いるのではなく、映像をめぐる様々な選択肢に目をむけ、多様化する映像表現と映像受容の在り方を、あらためて問い直してきました。芸術と映像が人にもたらしうるオルタナティブな価値観（ヴィジョンズ）の生成を促し、存続させていくためのプラットフォームとして、発信を続けています。

毎回、テーマや「映像とは何か」という問いを投げかけながら、国内外の映像表現を紹介してきた10年以上の歳月のなかで、映像を取り巻く状況は大きく変化してきました。

このような映像をめぐる社会状況の変化のなかで、「映像とは何か」という問いを引き続き深めていくために、15回目を迎える恵比寿映像祭2023からは、「コミッション・プロジェクト」やシビック・クリエイティブ・ベース東京（CCBT）との連携をはじめとする、いくつかの新たな試みを開始することで、継続的なプラットフォームとしての映像祭の役割をさらに強化していきたいと思います。

※今年度より、実施回数を掲げる名称から実施年の西暦表記へ変更となりました。

恵比寿映像祭とは

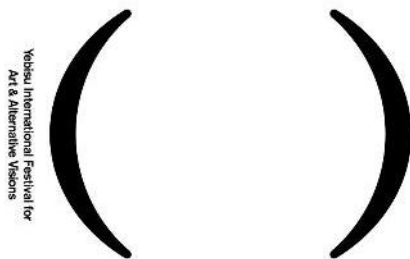
恵比寿映像祭は、平成21(2009)年の第1回開催以来、年に一度恵比寿の地で、展示、上映、ライブ・パフォーマンス、トーク・セッションなどを複合的に行ってきた映像とアートの国際フェスティバルです。映像分野における創造活動の活性化と、映像表現やメディアの発展をいかに育み、継承していくかという課題について広く共有する場となることを目指してきました。

ロゴについて

映像をめぐって、ひとつではない答えをみんなで探していこう！という「恵比寿映像祭」の基本姿勢を、オープンなフレームとしてのカッコに託しました。

—— 映像というカッコにあえて入れてみることで、
はじめて見えてくるものがあるはず

何かを限定するためではなく、いろんなものを出し入れて、よく見てみるためのカッコです。



開催概要

名称 | 恵比寿映像祭2023「テクノロジー？」
Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2023, "Technology?"

会期 | 2023年2月3日(金)～2月19日(日)《15日間》

時間 | 10:00～20:00(最終日は18:00まで)
※それぞれ入館は閉館の30分前まで

休館 | 毎週月曜日

コミッション・プロジェクト(3F展示室)のみ、3月26日(日)まで開催
時間は、10:00～18:00(木金のみ20:00まで)

会場 | 東京都写真美術館／恵比寿ガーデンプレイス センター広場／地域連携各所ほか

料金 | 入場無料
※一部のプログラム(上映など)は有料
※オンラインによる日時指定予約を推奨します(詳細は26ページ)

主催 | 東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／日本経済新聞社

共催 | サッポロ不動産開発株式会社／公益財団法人日仏会館

後援 | 在日スイス大使館／在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本／
株式会社TBSホールディングス／J-WAVE 81.3FM

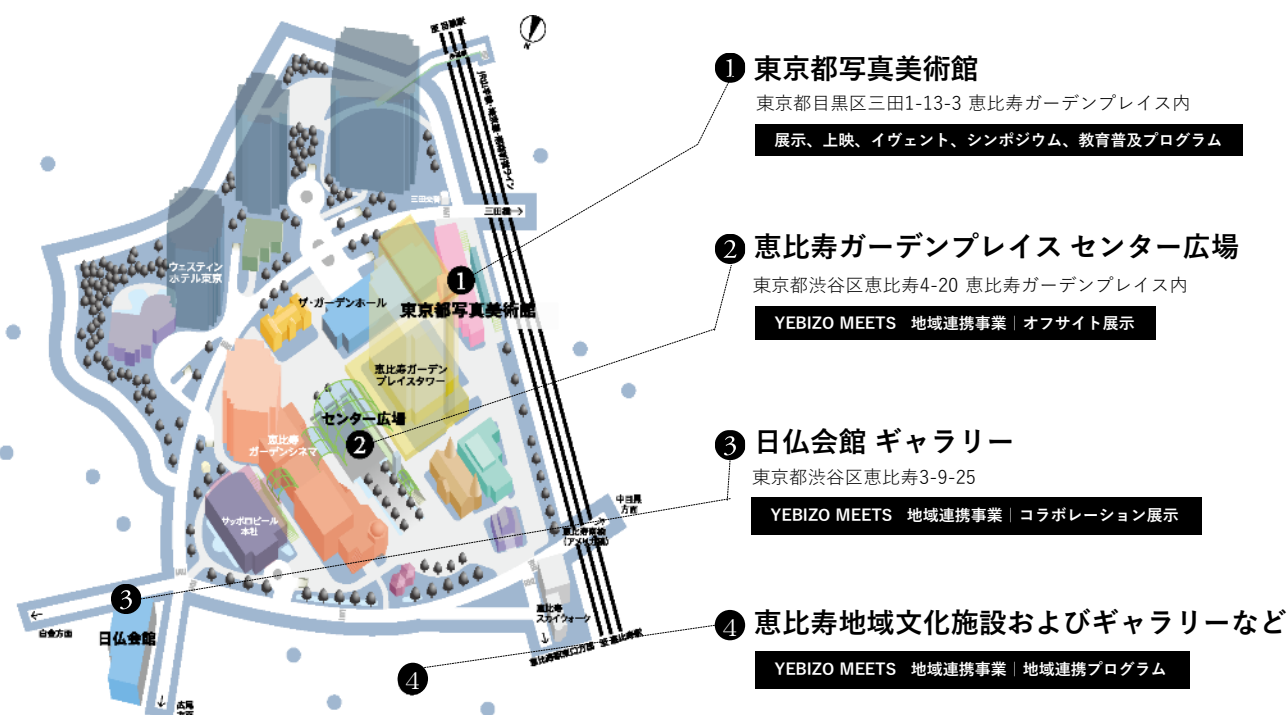
協賛 | リトアニア文化会議／EU・ジャパンフェスト委員会／サッポロビール株式会社／
東京都写真美術館支援会員

協力 | 在日リトアニア共和国大使館／Jonas Mekas 100！

公式HP | www.yebizo.com

公式SNS | Twitter: twitter.com/topmuseum/ Instagram: [instagram.com/yebizo/](https://www.instagram.com/yebizo/)

会場構成



恵比寿映像祭2023

テクノロジー？

Yebisu International Festival for
Art & Alternative Visions 2023

Technology ?

私たちが日常目にする映像技術である、写真、映画、ビデオやアニメーション。これら映像表現のテクノロジーは、19世紀以降、大きく発展し、今日では高解像度のイメージや、より長時間の映像を処理することができるようになりました。映像技術は、より高精細で、より情報量の多いイメージを作ることを目指して発展してきたと言っても良いかもしれません。

技術には、一般化されて広く共有され、定着していくという側面がありますが、共有されるための規範は、誰が、いつ、どのように決めるのでしょうか？今当たり前に見ている高精細の映像が、100年後にどのようなリアリティとして受け止められるのかは誰も予測できません。歴史を振り返ったとき、技術が思いがけない要素として働いていた、ということを発見することがあります。例えば、高解像度の映像の中に、あえて手作りの感触を含めることで、臨場感を高めるなど、ときにアーティストの表現は、そうした技術との対話の中から生み出され、思いもよらない発見をする可能性を持っています。

恵比寿映像祭2023では、「テクノロジー？」というテーマを通して、多種多様な映像表現の実践を検証し、アートと技術との対話の可能性を考察していきます。

総合テーマ「テクノロジー？」のコンセプト

総合テーマ「テクノロジー？」は、以下のような視点で構成しています。パンデミックによってテレワークやオンラインでの会話が日常化し、また、AI(人工知能)や機械学習、Web3.0、メタヴァース、AR/VR、NFTなどの新しい技術の普及は、人々の身体感覚までも変化させています。しかし、そもそも現代に限らず、写真や映像が、機械の眼を通して表現されるものと定義すれば、近代以降、すべての表現は、テクノロジーを介在させていると言っても過言ではありません。「恵比寿映像祭2023」では、時代ごとにアートと技術がどのような関係のなかで表現を生み出してきたかを考察することで、テクノロジーに溢れた現代を考えるヒントを探っていきます。

1. 時代ごとのテクノロジー(技術)を紐解く

イメージの標準化を解体し、再構築する

誰もがスマホで映像を撮影できてしまうように、産業や既存の規格により、写真や映像のような技法は標準化されてしまうことが一般的です。しかしアーティストたちは、あえてそのことに疑問符を投げかけ、見え方や成り立ちに手を加え、独自の挑戦をしてきました。テクノロジーを紐解き、新しい表現の可能性を探る取組みを紹介していきます。

技術と表象の見えない部分を覗き見る

写真や映像のイメージは、意識して覗き見なければ見えないままに表象のみが流通してしまいます。技術の裏側に何があるのか、いかにして表現が成り立っているかなど、その相関関係に目を凝らしていきます。



ルー・ヤン〈DOKU(ルー・ヤンのデジタル転生)〉2020年〜 [参考図版]
出品協力：スパイラル／株式会社ワコールアートセンター

2. 身体や視点を拡張させるテクノロジー

技術を通じて拡張する身体

私たちは映像を見る時にテクノロジーを介して、視覚や身体が拡張していくような体験を既に体感しています。最近では仮想空間のアバターイメージを通して、デジタル空間で生きるような感覚や視覚による超越を感じるなど技術によって得たイメージは拡がりを見せています。

人工であることのリアル。デジタルカルチャーへの問い

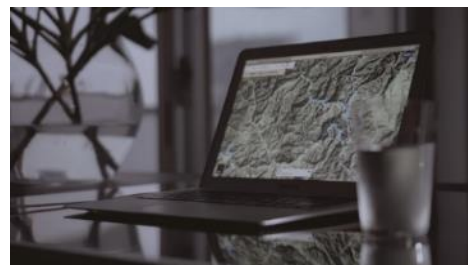
生まれた時からデジタルに囲まれ、コミュニケーションもデジタル上で交わされることが当たり前となった世代からは、ジェンダーも国籍も哲学もすべて越境するような思想が生まれ、その共通言語が存在しています。リアリティとテクノロジーの間を駆け抜ける文化の本質的な問いを投げかけます。



越田乃梨子《机上の岸にて》2010年 東京都写真美術館蔵

3. 都市や自然のナラティブ(物語性)に潜むテクノロジー

都市は、歴史や個人の記憶、自然環境の変化など様々な物語を抱えています。現代に至っては、スマートシティと呼ばれるように、都市は人工的な有機体としての役割を担っているとも言えるでしょう。人間が作り出した都市のテクノロジーや、そこに存在する自然に目を向けると、見えない都市の営みが現れてきます。都市や自然の諸相をめぐるアーティストたちの表現や、そこに向けられた機械の眼などを歴史的に考察します。



梅沢英樹＋佐藤浩一《Echoes from Clouds》2021年

恵比寿映像祭2023の見どころ

恵比寿映像祭は、今回の開催で15回目を迎えます。テーマに関連した展示や上映プログラムのほか、今年は「コミッション・プロジェクト」を新設し、恵比寿映像祭の根源的な問いである「映像とは何か」を軸に、新作となる委嘱作品を発表します。また、他組織とのコラボレーション展示など新たな要素を加え実施いたします。

国内外の審査委員により選出された作家が新作に挑む —— 「コミッション・プロジェクト」

今回から始まる「コミッション・プロジェクト」は、約300名の候補者から日本を拠点に活動する新進アーティストを選出し、制作委嘱した新作の映像作品を新たな恵比寿映像祭の成果として発表します。アーティストには、荒木悠、葉山嶺、金仁淑(キム・インスク)、大木裕之の4名が、国内外の審査委員により選出されました。

総合テーマに拠らない、恵比寿映像祭の根源的な問いである「映像とは何か」を軸にそれぞれが新作を発表。東京都写真美術館3F展示室にて披露します。また、会期中にこの4作品のなかから特別賞を決定し、審査委員が登壇するシンポジウムで発表します。ぜひご期待ください。



荒木悠《仮面の正体(海賊盤)》2023年[参考図版] ©2022 Yu Araki

総合テーマ「テクノロジー？」を通じ、多様な表現からアートと技術の関係を考察する —— 展示プログラム

総合テーマ「テクノロジー？」のもと、時代ごとにアートと技術がどのような関係のなかで表現を生み出してきたかを考察し、テクノロジーに溢れた現代を考えるヒントを探っていきます。戦後日本美術の新たな時代を切り開いた「実験工房」による映写装置・オートスライドで制作された作品や、セルフCGによる人間像を仮想空間上でデジタル転生させ生死という根源的な問いを投げかける中国出身のマルチメディアアーティスト、ルー・ヤンなど、20世紀の名作から近年注目されるアーティストの作品まで、多様な表現を紹介します。

映像表現はその時代のテクノロジーに多大な恩恵を受け変化を遂げてきた時代の写し鏡とも言えます。アーティストの表現を通して、私たちの世界をとらえた作品群に、どうぞご注目ください。



ルー・ヤン〈DOKU(ルー・ヤンのデジタル転生)〉2020年～ [参考図版]
出品協力：スパイラル/株式会社ワコールアートセンター

歴史的重要な作から新世代の意欲作まで。テーマを紐解く恵比寿映像祭独自ラインアップ——上映プログラム

16ミリカメラにより身の回りの撮影を始め、唯一無二の「日記映画」を数多く残す、実験映画作家のジョナス・メカスのスペシャル上映や、《人のセックスを笑うな》など話題作を発表してきた井口奈己監督の劇映画とは異なる近作の挑戦を紹介する「井口奈己特集」、さらに、約40年のキャリアを持つ映像作家のペギー・アーウィッシュ特集上映や、「東京国際ろう映画祭」によるリンクプログラム「東京国際ろう映画祭一視覚の知性2023」ほか多種多様なプログラムがお目見え。

歴史的な重要な作から新世代の意欲作まで、技術的な目新しさよりも、テクノロジーと人間の関係性を批評的に探究する表現を軸に選出したラインアップは必見。作品の上映後には、監督やゲストとのQ&Aセッションもお見逃しなく。



ジョナス・メカス《アンディ・ウォーホルの授賞式》1964年／12分／英語／東京都写真美術館蔵

恵比寿映像祭2023の見どころ

恵比寿映像祭をより身近に、より楽しく —— 教育普及プログラム

「やさしい日本語」による恵比寿映像祭ガイドや手話通訳付きのオンラインプログラムなど、東京国際ろう映画祭の上映プログラムに呼応するようなインクルーシブプログラムを企画し、多様な人々が楽しめる環境づくりに注力しました。また予約不要で、気軽に参加できる「アニメーションオープンワークショップ」や、鏡リュウジの占星術により、思いがけない作品と結ばれる「星占いガイドダンス」、オンライン配信の「見どころトーク」など、恵比寿映像祭をより身近に、より深く楽しんでいただくための様々なプログラムをご用意しています。

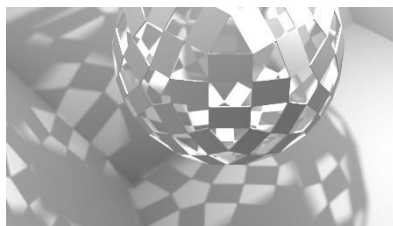


ボランティアによるアニメーションオープンワークショップ(2022年)の様子

多様な映像表現に触れる「開かれた」場として、様々な文化機関や地域のアートの担い手と連携 —— YEBIZO MEETS 地域連携プログラム

恵比寿ガーデンプレイス センター広場には、東京2020オリンピック競技大会の開会式のドローン演出を手掛けた演出メンバーによる光と影の屋外インスタレーションがCCBTとの連携により出現。また日仏会館ギャラリーでは、2021年パリでの展示で好評を博したローザンヌ美術大学による「オートメイテッド・フォトグラフィ」プロジェクトが在日スイス大使館により日本初公開。地域会場では総合テーマ「テクノロジー？」を共有した多彩な展示が開催されるなど、恵比寿映像祭を多面的にお楽しみいただけます。

またお馴染み文化施設及びギャラリーによる地域連携先とは、13のプログラムが実現。恵比寿周辺をめぐりながら最旬アートをお楽しみください。



左：野老朝雄＋平本知樹＋井口皓太《FORMING SPHERES》2023年〔オフサイト展示参考図版〕
右：《See me in Depth》2019年 ©ECAL/Gohan Keller〔コラボレーション展示 ローザンヌ美術大学(ECAL)、在日スイス大使館『オートメイテッド・フォトグラフィ』出展作品〕

総合テーマ「テクノロジー？」を掘り下げる —— 各種イベント

各種イベントを通じて、総合テーマ「テクノロジー？」をさらに掘り下げていきます。

19世紀の歴史から現代にいたるメディア・アートの変容について幅広く考察していく、日仏会館共催企画のシンポジウム「テクノロジー？-日本とフランスのメディア・アート」や、恵比寿ガーデンプレイス センター広場で展開する[YEBIZO MEETS | オフサイト展示]の屋外インスタレーション作品に関するスペシャルトークなど、恵比寿映像祭の楽しみを広げ、より深く知っていただく機会を提供します。また、田中和人がディレクターを務める「soda」による、総勢34アーティストの映像作品展〈50秒〉をライブ・イベントとして上映するなど、いつもとは違う美術館での新しい体験をどうぞお見逃しなく。



シンポジウム「スペクタクルの博覧会」(第14回恵比寿映像祭)の様子〔参考図版〕 撮影：新井孝明

恵比寿映像祭2023のプログラム概要

コミッション・プロジェクト展示 ▶P9-

恵比寿映像祭の新たな挑戦として、日本を拠点とする新進アーティストたちに映像作品を制作委嘱する「コミッション・プロジェクト」。ここではその成果発表として、今回選出された4作家それぞれの新作を発表します。表現手法も制作動機も多彩なアーティストの新作を通じて、「映像とは何か」という、恵比寿映像祭における根源的な問いを探究する新たな試みにご注目ください。

テーマ展示 2F ▶P13-

パンデミックによってテレワークやオンラインでの会話が日常化し、AI(人工知能)や機械学習、Web3.0、メタヴァース、AR/VR、NFTなど、新たな技術の普及は、人々の身体感覚までも変化させています。しかし、写真や映像は機械の眼を通して表現されるものと定義すれば、現代に限らず近代以降すべての表現は、テクノロジーを介在していると言っても過言ではありません。2F展示室では、20世紀の名作から近年注目されるアーティストの作品まで、多様な表現を紹介。アートと技術の関係を、身体や機械、人工などの観点から探ります。

テーマ展示 B1 ▶P14-

都市は、歴史や個人の記憶、自然環境の変化など様々な物語を抱えています。人間が作り出した都市のテクノロジーや、そこに存在する自然に目を向けると、見えない都市の営みが表れてきます。B1F展示室では、都市や自然の諸相をめぐるアーティストたちの表現や、そこに向けられた機械の眼などを歴史的に考察します。映像表現はその時代のテクノロジーに多大な恩恵を受けていますが、ここにあるのは単に技術に寄りかかる表現ではなく、ときに怜悧に、かつ作家たちの美意識をも反映するかたちで、私たちの世界を捉えた作品群です。

上映 ▶P17-

劇映画から、実験映画、ドキュメンタリー、アニメーション、現代美術作品まで、日本初公開作品含め、国内外から多様な作品を連日お届けします。映像の歴史を発展させるのは、技術的な発明に加えて、それらを用いた表現的な「発明」や、技術の本質を見つめる営みでもあります。例えば20世紀の日記映画や実験映画と現在の映像表現、それぞれの背景にあるのはどんな挑戦なのでしょう。技術的な目新しさよりも、テクノロジーと人間の関係性を批評的に探究する表現を軸に上映作を選出しました。作品の上映後には、監督やゲストとのQ&Aセッションも開催します。

イベント ▶P19-

ライブ・イベント、シンポジウム、トークセッションを開催。展示や上映だけではない様々な形式で、映像文化の楽しみ方や理解を深める場を提供します。

教育普及プログラム ▶P21

予約不要で、気軽に参加できる「アニメーションオープンワークショップ」や、思いがけなく作品と結ばれる「星占いでガイダンス」、オンライン配信の「恵比寿映像祭 見どころトーク」、恵比寿映像祭をより身近に、より深く楽しんでもいただくため様々なプログラムをご用意しています。また、やさしい日本語によるガイド、手話通訳付きのオンライン・プログラムを実施し、インクルーシブな観点から、より多様な人々が楽しめるよう環境づくりを行います。

YEBIZO MEETS 地域連携プログラム ▶P22-

「YEBIZO MEETS」は、多くの人々が多様な映像表現に触れる「開かれた」機会として、様々な文化機関や地域のアートの担い手と連携するプログラムです。恵比寿映像祭を多面的に楽しつつ、恵比寿周辺の街の魅力をより深く知っていただく機会にもなるでしょう。CCBTとの連携により恵比寿ガーデンプレイス センター広場に登場する光と影の屋外インスタレーションをはじめとして、各連携先会場で恵比寿映像祭と同時期に、総合テーマ「テクノロジー？」を共有した多彩な展覧会やイベントが開催されます。また、各会場をめぐるシールラリーでは、シールを集めた方々に記念品を贈呈します。

01. 荒木悠 | Yu ARAKI

恵比寿映像祭2023委嘱制作作品

仮面の正体(海賊盤)



《仮面の正体 (海賊盤)》2023年 ©2022 Yu Araki

【ステートメント】

私には「劇映画を撮る」という昔からの夢があります(アーティストですが映画監督を名乗っているのもそのためです)。ただし監督としての正式なトレーニングを受けてこなかったため、作り方がよくわからないまま見様見真似で制作を続けてきました。そんな至らない自分を支えてくれているのが、これまで他分野で培ってきた経験です。彫刻やメディア・アートで学んだこと、通訳や翻訳業での体験、演劇の現場で得た知見など。これらの技術を組み合わせた混合体が私なりの「映画」として、映画館ではない場所に立ち現れます。しかし模倣から始まっているため、まだまだオリジナルとは言い難く、ただ単に「映画らしきもの」になっていることへの自覚もあります。いわば、劣化コピーなのです。

理想的な自分とは程遠い、ニセモノな私は、やはりどこか不完全な物たちに魅了されてしまいます。例えば、ニューヨークで見かける自由の女神を象ったお土産品。サイズや色が異なったバージョンが幾つも店先に陳列されていますが、それらの顔を見比べると、同じモチーフでありながらそれぞれ表情に違いがあることに気づきます(そしてアメリカ土産であるにもかかわらず「MADE IN CHINA」の表記。この原型を作った職人たちの中で、実際に現地で自由の女神像を目にした人は果たしてどれくらいいるのでしょうか)。この造形的なズレを味わいとする感覚は、少々飛躍しますがジェームズ・ボンドやブルース・ウェインを演じた歴代の役者たちによる、それぞれの007やバットマンの違いを楽しむことと近い気がするのです(奇しくも、英語圏では美術用語の「鑄造」と、演劇・映画における「配役」はどちらも「キャスティング(casting)」という言葉が与えられているのは実に合点がいきます)。

型に流し込まれたとしても、思わずそこから溢れ出してしまうような、どちらかというと本質的ではない、余計な部分に強い関心があります。なぜなら、そういった余分な差異にこそ、唯一無二の個性が潜んでいると今回の制作過程で確信が持てたからです。不完全な私は、完全コピーを目指すのではなく、型に嵌りきらない部分にこそ光を当て、祝福したい。それは同時に、社会の中で課せられた役割を演じつつ、ほんの少しだけ自分自身を解き放ってみる行為でもあります。今回の主演であり、それを実践し続けている私のヒーロー、最高にアツい世界一のバンドマンたちにこのコミッション・プロジェクトを捧げたいと思います。

02. 葉山嶺 | HAYAMA Rei

恵比寿映像祭2023委嘱制作作品

Hollow-Hare-Wallaby



《Hollow-Hare-Wallaby》2023年 [参考図版] ©2022 Rei Hayama

【ステートメント】

あなたが今、映画を観ていて、スクリーンに死んだ動物が映し出されたとしましょう。果たしてその動物は死を演じているのでしょうか、それとも本当に死んでいるのでしょうか。この問いは、人間が作った物語の中で、人間が「人間でないもの」に何らかの役割を強いているという事実を突きつけるものです。

私は、両親の職業柄、人為的な要因で急激に変化している自然環境や、そこに生息する野生動物が抱える問題に深く関わってきました。そして、これらの経験は私の考え方に大きな影響を与え、私は、人間が「人間でないもの」を見たり、語ったりする際に起こる奇妙な現象、解釈、誤訳、創造について考え、そうした事柄に関する作品を作りはじめました。

私は、「人間でないもの」にとっての世界は、私の見ている世界と違うものだと考えています。また、私は、パラレルに存在しているその世界を、人間が見たり、知ったりすることは、決してできないと思っています。しかし、人間の想像力は、それを超えようとする。この能力は通常、物事が見えない場合のほうがよく発揮されるものです。私は、この能力により、人間が「人間でないもの」に対して押し付けてきた意味、役割、地位、関係性などを剥ぎ取り、突然目の前に何かが投げ出された時のように、ただ、人間が「人間でないもの」と共に存在している、圧倒的で、身震いするような地点において、再び彼らと遇おうとします。私のこの考え方と方法は、恐らく、ダンサーが極端にゆっくりと歩くことで自分の身体の見えない部分、骨や筋肉などがどのように動くのかを初めて知るようなものです。そして最終的に、私も、私とは異なる彼らも、さらに広大な循環の中で共に存在する小さな一部分であると知ることとも無関係ではありません。私の作品は、誰かが地球の上にじっと座って、人間が見ることも知ることもできない世界について思考を巡らすための「時間そのもの」だと言えます。私は作品を通して、誰かによって与えられた名前や役割などから解放された、完全な自由の中で人間が「人間でないもの」について考える機会を生み出すことを求めています。

03. 金仁淑 | KIM Insook

恵比寿映像祭2023委嘱制作作品

Eye to Eye



《Eye to Eye》2023年 [参考図版]
©2022 Kim Insook

【ステートメント】

国、民族、男女に限らず、便宜上や法律などの様々な理由により人はカテゴリーに分けられるが、その中には多様な考えやアイデンティティが在り、他者から特異と見られる人にも平穏な日常は存在することを考察し、多様な「個」の日常や記憶、歴史、伝統、関係性、そして共同体の中に存在する個々のアイデンティティなどをテーマに移民や地域のコミュニティの人々とプロジェクトを行っています。

主なメディアとして写真と映像を使用し、被写体と心理的に共感しながら彼らの生きる風景に自らの経験を移入し重ねる。被写体と関係性を作るためのコミュニケーションの過程を重視し、写真・映像・サウンド・パフォーマンスなどを用いたインスタレーションを制作しています。

自身のルーツである在日コリアンの「学校」「家族」の個人史と日常を捉えた《sweet hours》(2001–2020)、《SAIESEO: between Two Koreas and Japan》(2008–)をはじめ、国家政策の一環としてドイツへ渡った韓国系移民家族の日常と2世以降のアイデンティティに着目した《Between Breads and Noodles》(2014)、自身の結婚式のパフォーマンスを通じて伝統と儀式についての疑問や家族の拡張を模索した《The real wedding ceremony》(2010／2016)、まちの記憶を地域の子供へつなぐ《Continuous Way》(2013–2016)などのプロジェクトを通じて、自身が認識する「個」の領域は「家族」、そして「地域」へと拡張しました。

2021年にはコミュニティの中で「他人と築く家族」をテーマにしたプロジェクト《House to Home》の映像インスタレーションと、10歳の少女と共にジェントリフィケーションが起こるまちの過去・現在・未来を結ぶプロジェクト《Ari, A letter from Seongbuk-dong》の連携個展を開催。二つのプロジェクトをつなげる試みにより、環境の変化を誰もが経験すること、しかし本質的な関係性は変化や距離と関係なく続いていくことを示唆しました。

関係の始まりは互いの違いを認識し受容することから始まるのではないだろうかと考えています。

04. 大木裕之 | OKI Hiroyuki

恵比寿映像祭2023委嘱制作作品

meta dramatic 劇的



《meta dramatic 劇的》2023年 [参考図版] ©2022 Hiroyuki Oki
Courtesy of the artist and ANOMALY

【ステートメント】

私は、常に〈全体的な生と世界のあり方〉を考え、作品それぞれの成立の状況に相応しい作品づくりをめざしています。

〈全体的〉とは、様々な次元や領域やスケールでの全体性であり、またそれらが互いに混ざり合い重なり合っている中で、いかに考え、形にしてゆくかの絶え間ない実践を続けています。

私は、いわゆるジャンルを横断した活動をしておりますが、中心は〈映画／映像〉と〈ライブ／パフォーマンス〉の領域です。この2つの領域は、現代においてもっとも基本的な領域と捉えています。しかしながら、両者を全体的に捉える思考と実践は、社会的にあまりにもまだ成熟しておらず、そのことによってそれぞれの領域の欠落が歴然としてきていると思うのです。それとともに、特にここ数年、様々な形で出現する出来事と、それらに翻弄されてゆく私たちと社会の姿が、その欠落に象徴されていると見做しています。

そもそも、〈映画／映像〉におけるカメラでの1ショットの撮影は、いわゆる「現実」のライブ映像であり、20世紀は、そのショットを集積、積み重ねて文化としてきました。一方の〈ライブ／パフォーマンス〉は、根本的にはライブのままでありながら、〈映画／映像〉によって撮影／記録／再生／記憶され続けてきました。その両者の関係は、構造的な領域をはるかに超えて、人間個人と社会のシステム全体の虚構と現実複雑に絡み合い、その中での人間の行動が結果として世界環境そのものを不自然にしています。特に、個人と社会にまたがる言葉の機能不全と、個人の認識能力の全体性の欠如が、様々な障害を引き起こす結果となっています。しかし、欠落と捉えるよりもその現実を認め、未来への可能性を探り、光をささやかにでも見出してゆくことこそが重要だと思えます。

今回の新作《meta dramatic 劇的》は、長年にわたる〈映画／映像〉と〈ライブ／パフォーマンス〉の実践の凝縮として、世に問うことのできる作品になると確信しています！

05. ルー・ヤン | LU Yang



〈DOKU (ルー・ヤンのデジタル転生)〉 2020年～

[参考図版]

出品協力：スパイラル／株式会社ワコールアートセンター

宗教や死生観、脳科学、神経科学などの問題が絡み合う世界を、強烈なヴィジュアルを通して表現してきたルー・ヤン。本作は作家が2020年から取り組んでいる〈DOKU(ドク)〉シリーズの最新作である。主人公は最新のモデリング技術を用いて作られた、人間(=作家本人)の「デジタル転生」という存在を表したDOKU。その名は仏教の経典にある言葉「独生独死独去独来」に由来し、現実世界はもとより仮想空間やどの次元においても、命は孤独であることを含意する。デジタル・テクノロジーによる「転生」を通して、生死という根源的な問いがどのように開かれていくだろうか。

06. ホウコォ・キュウ | Houxo QUE



《Death by Proxy #1》

2020年

壁にかけられたディスプレイには、建築資材の単管パイプが鋭く突き刺さっている。断末魔の叫びのようなグリッチが表示されたディスプレイの裏側へと突き抜けたパイプは、分厚い壁もたやすく貫通し、さらに床へと伸びている。パイプが突き刺さり、本来の機能から大きく逸脱したディスプレイは、美術館の展示室の中でカメラのように存在を拡張し、映像表現やそれを支えるテクノロジーについて、本質的な問いを投げかける。

07. 細倉真弓 | HOSOKURA Mayumi



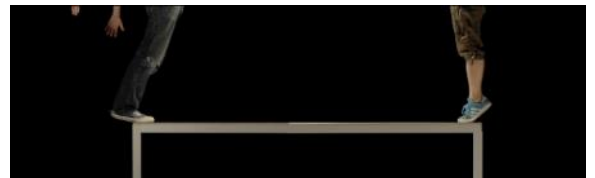
《digitalis #10》

〈digitalis〉より 2021年

©Mayumi Hosokura, courtesy of
Takuro Someya Contemporary Art

天井から縦に吊るされたディスプレイの画面に、写真が一枚ずつ右から左へゆっくりと流れていく。これまでも細倉は、人の肌や鉱物などを分け隔てなく、肌理を確かめるように写してきた。途切れることなく流れるイメージを一つひとつ眺めていると、次第に各イメージの境界が曖昧になっていく。もはや、カラーやモノクロといった色彩の違いも関係なく、イメージ上のあらゆる物質がヒエラルキーなく、フラットにつながっていく。

08. 越田乃梨子 | KOSHIDA Noriko



《机上の岸にて》2010年

東京都写真美術館蔵

2台のカメラを表裏に配してひとつの出来事を撮影し、一画面に合成した〈破れのなかのできごと ～壁・部屋・箱～(三部作)〉。同じ空間を別々に撮影し、左右に並べて合成することで異なる空間や時間感覚を生み出す《机上の岸にて》や、ひとつの出来事をカメラ2台で撮影、2本の時間軸と異なるふたつの視点が過去と未来をつなぐ物語を構成する《幽霊たち》。人間の身体がシンプルかつ独自の手法で映し出され、「現実のように見える」映像の構造を浮かびあがらせる作品群は、イメージの成立や映像の本質を問う。

09. カール・シムズほか | Karl SIMS, etc. ●

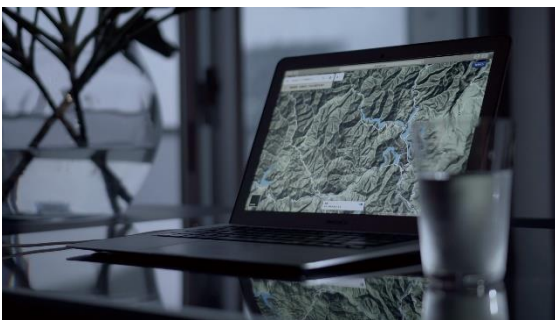
〈コンピュータ・グラフィックス アンソロジー〉
1991年

〈コンピュータ・グラフィックス アクセス89-92〉
1992年

東京都写真美術館蔵

1967年から1988年に制作された世界のCGを多様な分野から体系化した作品集。〈コンピュータ・グラフィックス アンソロジー〉は、世界10カ国の主要作品の中から時代と分野を網羅し、初期のフライト・シミュレーション、建築・医学・都市計画、流体力学・工業デザイン・宇宙計画、CM・アート作品など143作品を厳選。〈コンピュータ・グラフィックス アクセス89-92〉は、90年頃に広がった多様な産業・放送・芸術・広告・科学研究などの分野における作品群を収録。現在では当たり前となったCGの原点となる作品群を当時のレーザーディスクによって紹介する(期間中、各レーザーディスクを1日毎にループ再生)。

作品解説 | テーマ展示 B1F

10. 梅沢英樹+佐藤浩一 |
UMEZAWA Hideki + SATO Koichi

《Echoes from Clouds》 2021年

かつて我々は自然の営みに耳を澄まし、その反響に呼応するように生活を育んできた。本作において、イメージ/サウンドは水がつながる都市と自然、需要地と供給地の関係性を想起させる。フィールドレコーディングをもとにしたサウンドは撮影地のサウンドスケープを展開しながらも、イメージとの乖離を時折生じさせ、そのズレは、人々が資源を管理する社会の持続可能性に疑念を抱かせる。

11. 築地仁 | TSUKIJI Hitoshi

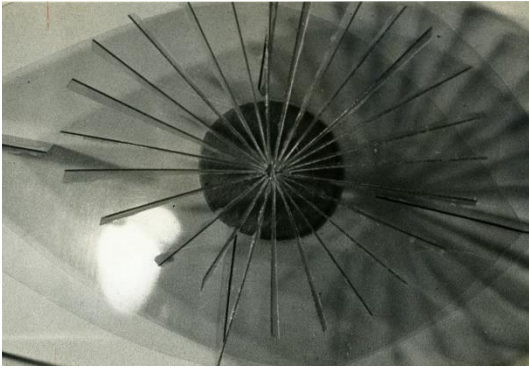


〈写真像〉より
1984年

東京都写真美術館蔵

1984年に同名の写真集としてまとめられた〈写真像〉では、主に高層ビルや工場、橋脚など、生活や産業活動の基盤となる大規模な建造物を、正方形のフォーマットが特徴の6×6cm判のフィルムカメラでとらえている。全体ではなく、ひとつの部分や面が際立つように撮影された建造物の表情は無機的だ。都市の中の植物がわずかに現れるが、葉についた水滴さえ、まるで工事現場のコンクリートから突き出た鉄筋のように結晶化されている。

12. 実験工房 | Experimental Workshop

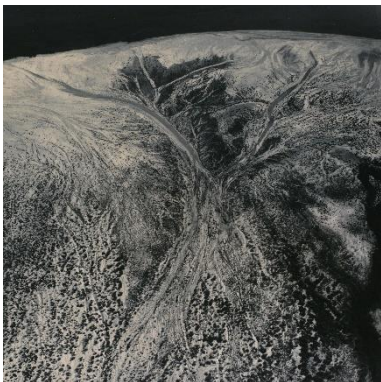


オートスライド《試験飛行家W・S氏の眼の冒険》
1953/1986年

個人蔵

本作は、スライド画像とテープレコーダーの音源を同期できる映写装置・オートスライドで制作された。1953年9月の「実験工房第5回発表会」で初公開されている。当時の機材は現存しないが、発表された4作のうち、スライドと音源が残されていた3作が1986年に再制作された。手作業で制作されているために素朴な印象であるが、その内容は環境問題など現在にも通じるテーマを含んでいる。当時の制作風景がメンバーのひとり、大辻清司によって撮影されている。

14. エメット・ゴーウィン | Emmet GOWIN ●



《ソルトン海の縁、カリフォルニア州》
1990年

東京都写真美術館蔵

家族を中心とした被写体を写した私的で親密なポートレートや、何気ない日常の一瞬を詩情豊かに表現した作品で評価を得ていたゴーウィンは、アメリカのカスケード山脈で1980年に発生したセント・ヘレンズ山噴火を機に航空写真を始める。自然の威力と人間の営為が、風景や地形を破壊し変貌させた様を思慮深く観察して、風景の中に見られる線を即物的に捉えた。静謐さを湛えながら地球の表情を克明に描写している。

13. 北代省三 | KITADAI Shozo

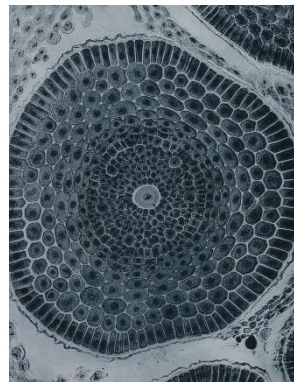


《浜離宮》1956年

東京都写真美術館蔵

北代がヘリコプターから空撮した東京の姿である。写真を写すことは発見と選択という行為の組み合わせであると考えた北代は、新しい視覚を求めて、私たちが普段向けている視線とは別の角度から対象を眺めることを試みた。本作では、冷厳かつ機械的な視線で撮影することで、東京が持つ都市の美を引き出そうとしている。急速に進歩する技術の本質的な特性を問い直しながら表現活動を実践した北代の思考実験を見てとることができるだろう。

15. ロール・アルバン＝ギヨー | Laure ALBIN-GUILLOT ●



《大麦の根(断面)》〈MICROGRAPHIE DECORATIVE〉より
1931年

東京都写真美術館蔵

本作は、顕微鏡標本を専門とする研究者であった亡き夫へのオマージュとして、1931年に出版された大判のポートフォリオである。〈MICROGRAPHIE DECORATIVE〉(装飾的顕微鏡写真)の名のとおり、サイの角や馬の蹄、珪藻、植物の細胞や種子などの顕微鏡写真を形式美によって表現し、写真の装飾的応用を提唱した。顕微鏡というテクノロジーを介して肉眼では見えないイメージが可視化され、科学と視覚芸術を組み合わせた新たな表現が生み出されている。

16. 杉浦邦恵 | SUGIURA Kunié ●



《ボタニクス 13, 1989》〈Botanicus〉より 1989年

東京都写真美術館蔵

お茶の水女子大学物理学科中退後に渡米し、1960年代からニューヨークを拠点に活動続ける杉浦は、写真というメディアを通じた実験的手法を絵画等の異なる領域と融合させ、多岐にわたる表現に挑戦してきた。カメラを用いず、暗室で印画紙上に置いたモノを感光させるフォトグラムから生まれた植物や生物のシリーズからは、コントロールできない生命体と写真術をめぐる、作家の実験と対話の時間が浮かび上がる。

17. エンネ・ビアマン | Aenne BIERMANN ●



《私の子供》1931年

東京都写真美術館蔵

1920年代半ばにドイツを中心とした写真の新たな潮流を生み出した作家のひとりであるビアマン。彼女がカメラという機械の眼を通して切り取ったポートレートは、まるで静物写真のような冷静さを帯びている。極端なクローズアップによって撮られた人物は、ビアマン自身や家族が被写体であるという関係性や意味がはぎとられているようだ。光の濃淡、人物の顔の傾き、視線といった、画面を構成する要素に潜在する美が写し出されている。

18. 山沢栄子 | YAMAZAWA Eiko ●



《物体》〈私の現代〉より 1986年

東京都写真美術館蔵

アメリカで写真を学んだ山沢は、帰国後にポートレイトの撮影や商業写真を主な仕事としていた。1950年代からオブジェやガラクタを写した抽象絵画風の作品をアブストラクト写真と呼び、本格的な制作に取り組む。〈私の現代 / What I Am Doing〉は、1986年に開催された山沢の最後の新作個展に出品されたシリーズである。自身の過去の作品や写真機材といった対象を配置し、色彩を構成して、写真による造形の実験を重ねることで、独自の芸術表現に到達した。

19. フィオナ・タン | Fiona TAN



《リフト》2000年

東京都写真美術館蔵

映写機で投影される16ミリフィルムの映像には、タン自身が数十個の大きな風船によってゆっくりと空中に浮かびあがる。その映像と対置するかたちで、浮遊直前の彼女の足元だけを捉えたビデオが小さなモニターに映し出されている。同名のシルクスクリーン作品にはそれらの瞬間が凍結されたような静止したイメージが写り、同じ出来事が複数の視点と手法を用いて記録されている。子どもの頃からの夢だったという空中浮遊を果たしたタンの姿が、夢の記録ではなく鮮やかで繊細な記憶として立ち上がる。

01. スペシャル上映 [ジョナス・メカス生誕百年記念] ジョナス・メカス—3章のフィルム・プログラム

ジョナス・メカスの映画作品に新しい角度からアプローチし、彼の映画制作をアメリカの前衛芸術の広い文脈の中で明らかにすることを目的とし、3つの章を設けた。メカスの知的、組織的、そして経営的な活動、さらに芸術としての映画を見る新しい習慣を育むことへの献身、および、映画制作者に刺激を与えた多様なコンテキストを紹介する。[イネサ・ブラシスケ、ルーカス・ブラシスキス]

【ゲスト・プログラマー：イネサ・ブラシスケ、ルーカス・ブラシスキス】

【第1章 歴史を記述すること、歴史へ記述されること：ニューヨーク前衛の記録とポートレート】



■ジョナス・メカス《アンディ・ウォーホルの授賞式》1964年／12分／サウンド／東京都写真美術館蔵

□ジョナス・メカス《ゼフィーロ・トルナー、あるいはジョージ・マチューナス（フルクサス）の生活風景》1992年／35分／英語 [日本語字幕付]

□ストーム・デ・ハーシュ《Newsreel: Jonas in the Brig》1964年／5分／サイレント

□ギデオン・バックマン《Jonas》1968年／32分／英語 [日本語字幕付]

【第2章 カメラを持った遊歩者^{フラヌール}】



■ジョナス・メカス《Williamsburg, Brooklyn》2003年／15分／サイレント

□ジョナス・メカス《カシス》1966年／4分30秒／サウンド

□ジョナス・メカス《旅の歌》1967-1981年／25分／英語 [日本語字幕付]

□ジョナス・メカス《Song of Avignon》1998年／5分／英語 [日本語字幕付]

□ジョナス・メカス《富士山への道すがら、わたしが見たものは・・・》1996年／24分／英語

【第3章 時間とまなざしの動き：マリー・メンケン監督作品特集上映】



□マリー・メンケン《Glimpses of the Garden》1957年／4分／サウンド

□マリー・メンケン《Notebook》1962年／10分／サイレント

■マリー・メンケン《Go Go Go》1964年／11分30秒／サイレント

□マリー・メンケン《ライツ》1966年／6分30秒／サイレント

□マリー・メンケン《Sidewalks》1966年／6分30秒／サイレント

□ジョナス・メカス《サーカス・ノート》1966年／12分／サウンド

02. ペギー・アーウィッシュ特集—アート・オブ・ザ・モーター



1970年代頃からフェミニズム、パンクを軸に8mm映画制作を始めたペギー・アーウィッシュは、一貫したスタイルを持たない、ヘテロジニアスな作家として自身を説明する。一方でテクノロジーの変遷に対しては批評的な姿勢を貫き、加速する映像技術に吸収されることなく、むしろ自らの手のうちの中で技術と戯れるかのように制作を続けている。本プログラムではこうしたアーウィッシュの野心的な実践を紹介する。

【ゲスト・プログラマー：井上絵美子、中西香南子(subversive records)】

【リンク：subversive records】

□《The Vision Machine》1997年／20分／英語 [日本語字幕付] Courtesy Electronic Arts Intermix (EAI), New York

□《She Puppet》2001年／15分／英語 [日本語字幕付] Courtesy Electronic Arts Intermix (EAI), New York

□《The Star Eaters》2003年／24分／英語 [日本語字幕付] Courtesy Electronic Arts Intermix (EAI), New York

□《Warm Objects》2007年／8分／英語 [日本語字幕付] Courtesy Electronic Arts Intermix (EAI), New York

■《The Falling Sky》2017年／10分／英語 [日本語字幕付] Courtesy Microscope Gallery

□《Kansas Atlas》2019年／17分／英語 [日本語字幕付] Courtesy Microscope Gallery

□《Curve the Night Sky》2021年／5分／英語 [日本語字幕付] Courtesy Electronic Arts Intermix (EAI), New York

03. 飯村隆彦特集



2022年7月31日に逝去した実験映像の草分けであり、フィルム、ビデオ、パフォーマンスと横断的に映像のテクノロジーに取り組んだ、飯村隆彦の作品を上映し、氏の活動の軌跡を辿る。1960年代にオノ・ヨーコ、赤瀬川原平、小杉武久、土方巽ら前衛芸術家の協力のもと、8mmや16mmの前衛映画を個人で制作。またフィルムにとどまらず、ビデオアート、パフォーマンスと領域を横断し、独自の映像世界を切り開いた。近年、東京都写真美術館に収蔵された作品の一部およびビデオアートセンター東京(VCT)がデジタル化した作品から合計11作を一挙上映する。

- 《くず》1962年／7分51秒／サウンド(音楽：小杉武久)
- 《いろ》1962年／10分28秒／サウンド(音楽：刀根康尚)
- 《ダダ 62》1962年／10分9秒／サイレント
- 《オナン》1963年／8分6秒／サウンド(音楽：刀根康尚)

- 《リリパット王国舞踏会》1964年／12分50秒／サウンド(音楽：刀根康尚、飯村隆彦)
- 《Ai (Love)》1962年／10分／サウンド(音楽：オノ・ヨーコ)
- こまですべて東京都写真美術館蔵
- 《椅子》1970年／5分28秒／サウンド
- 《まばたき》1970年／1分55秒／サウンド

- 《男と女》1971年/1992年再編集／7分／サウンド
- 《視覚的論理(と非論理)》1977年／20分／サウンド
- 《ア・イ・ウ・エ・オ・ン》1982年／9分18秒／サウンド
- こまですべてCourtesy of MORI YU GALLERY
- *ビデオアートセンター東京によりデジタル化

04. 井口奈己特集



《人のセックスを笑うな》や《ニシノユキヒコの恋と冒険》など、人間同士の複雑な感情を繊細に描いた話題作を発表してきた井口奈己監督。本映像祭では、劇映画とは異なる近作の挑戦ほかを紹介する。コロナ禍の2020年12月に宮崎で開催されたワークショップ「こども映画教室」を記録した初のドキュメンタリー《こどもが映画をつくるとき》では、初対面の12人のこどもたちが3日間で映画をつくり、上映する姿にカメラが向けられ、だれもが主人公となる場面が映し出されていく。またこの機会に、井口の音楽短編映画《だれかが歌ってる》と初監督作品《犬猫(8mm)》も上映する。

- ① □《こどもが映画をつくるとき》2021年／116分／日本語
[英語字幕付]

- ② ■《犬猫(8mm)》2000年／84分／日本語[英語字幕付]
- 《だれかが歌ってる》2019年／30分／日本語[英語字幕付] すべて©ナミノリプロ

05. 東京国際ろう映画祭—視覚の知性2023

「東京国際ろう映画祭」が上映してきた作品を4つのプログラムで紹介する。ろう者たちの音楽を問う《LISTEN リッスン》、稀代のろう映画監督・深川勝三による1970年代の東京を舞台にした人間ドラマ《たき火》、家族の不条理を描く《田中家》、インド人の盲目の蠟燭職人と日本人のろう者の舞踏家を追ったロードムービー《TOTA》——目で生きる人たちの感覚や知覚を通じて浮かび上がってくる表象や新たな概念を体験し、この世界を捉え直していく4作品。[牧原依里]

【ゲストプログラマー：牧原依里(東京国際ろう映画祭)ディレクター】 【リンク：東京国際ろう映画祭】



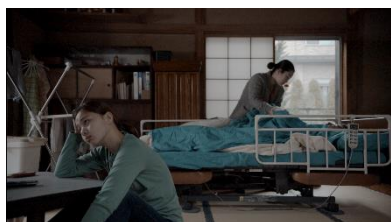
【東京国際ろう映画祭—視覚の知性2023①】

牧原依里・零境(DAKEI)《LISTEN リッスン》2016年／58分／サイレント／日本手話・日本語字幕／配給：アップリンク
©deafbirdproduction 2016



【東京国際ろう映画祭—視覚の知性2023②】

深川勝三《たき火》1972年／108分／サイレント／日本手話・日本語字幕



【東京国際ろう映画祭—視覚の知性2023③】

牧原依里《田中家》2021年／60分／サイレント／日本手話・日本語字幕・英語字幕 ©deafbirdproduction 2021



【東京国際ろう映画祭—視覚の知性2023④】

八幡亜樹《TOTA》2012年／52分／サイレント(一部音あり)／日本手話・日本語・ヒンディー語・日本語字幕・英語字幕
©Aki Yahata

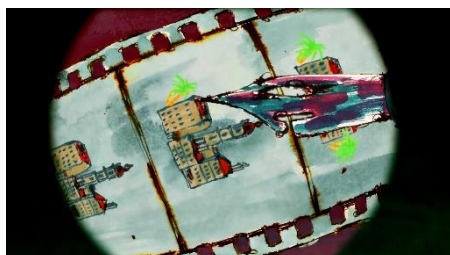
06. 2.5Dと実写アニメーション—コマ撮リアニメーションを考える



本来動かない絵を1コマずつ撮影し、動いているように見せるアニメーションは、今日アートから娯楽や広告CMに至るまで、多岐にわたる領域で生み出されている。片目を閉じて見るとより立体感を感じることができる2.5Dアニメーションから、16mmフィルムで多重露光やタイムラプス等の撮影技法を用いた作品、実写のコマ撮りと手描きアニメーションを行き来する作品まで、多様な技術を組み合わせて制作された短編アニメーションを特集する。各作品の仕組みを紐解くことで、映像の現在を考える。

- 最後の手段《深山にて》2012年／9分44秒
- 磯部真也《EDEN》2011年／15分20秒／日本語
- 磯部真也《For rest》2017年／16分29秒／日本語
- 磯部真也《13》2020年／10分／日本語
- にいやなおゆき《乙姫二万年破魔矢》2022年／3分10秒／日本語
- にいやなおゆき《乙姫二万年》2019年／35分30秒／日本語

07. アニメーション? テクノロジー? —DigiCon6 ASIA



次世代を担う映像クリエイターの発掘・育成を目的として、2000年にスタートしたアジア最大規模のショートムービーの映像祭「24th DigiCon6 ASIA」(TBS主催)からの特別プログラム。アジア各地域の創り手の「いま」を映す力強い11作品を厳選。時空を超えた映像の旅は、忘れられない風景や忘れてはいけない物語を描き、その想像力はアジア、世界を巡り、やがて未来につながる。表情豊か、色彩鮮やかなショートムービーの世界を展開する。[山田亜樹]

【ゲスト・プログラマー：山田亜樹(DigiCon6 ASIAフェスティバル・ディレクター)】
【リンク：DigiCon6 ASIA】

- ロヤ・サリミ《Soo》2022年／6分41秒
- 木原正天《ときめく良太》2022年／4分15秒／日本語
- 崎村宙央《The Swamp (All That I Can't Leave Behind)》2022年／12分28秒
- 大柴拓《音楽劇「救世主うたのお姉さん」》2022年／9分21秒／日本語
- ムン・スジン《Persona》2022年／6分45秒
- シャー・フェイ《It》2021年／6分41秒
- ウィン・ヤン・リリアン・フー《My Dear Son》2022年／8分55秒
- 許煒《薄明》2022年／6分50秒
- 西野朝来《nowhere》2022年／7分31秒／日本語
- 金子勲矩《Magnified City》2022年／11分34秒
- ソン・カイ・チョン&ステップシー《Everywhere》2022年／9分25秒

イベント

ライヴ・イベント



soda 〈50秒〉

田中和人がディレクターを務める京都ベースのアーティスト・ラン・スペース「soda」の企画により、2022年11月に開催された総勢34組のアーティストによる映像作品展〈50秒〉を恵比寿映像祭2023で上映。1895年のリュミエール兄弟による記念碑的映像作品《工場の出口》が約50秒であったことを起点に、127年後の現代を生きるアーティストによる50秒の映像作品を一挙上映し、アートとしての映像の新しい可能性を探ります。[田中和人]

[日時]

2023年2月3日(金)、7日(火)- 10日(金)、14日(火)- 17日(金)11:00-13:50 (5回上映)／
2月4日(土)、5日(日)、11日(土)、12日(日)、18日(土)13:30-14:04 (1回上映)／
2月19日(日)16:00-17:42 (3回上映)

[会場] 東京都写真美術館1F ホール

[料金] 無料

[上映+トーク] 2月12日(日)18:00- 田中和人、高橋耕平

シンポジウム

コミッション・プロジェクト－委嘱制作と映像作品の可能性

恵比寿映像祭2023からスタートする新規事業「コミッション・プロジェクト」は、日本を拠点に活動する新進アーティストに制作委嘱した映像作品を「新たな恵比寿映像祭」の成果として発表するものです。これまでに蓄積した国内外のネットワークを活用し、将来的に国内外の文化施設や文化組織での発信へと広げることで、アーティストの創造活動を支援するスキームを作っていきます。本プロジェクトの審査委員を招き、現代の映像表現の可能性を考察することで、西洋中心の近代史から、アジアにおける写真映像史やこれからの写真映像表現を語りなおす機会とします。また、本シンポジウムにおいて、会期中に開催する最終審査で決定した「コミッション・プロジェクト」特別賞を発表します。[日英逐次通訳付]

[日時] 2023年2月17日(金) 18:00-20:30

[会場] 東京都写真美術館1Fホール(定員190名)

[パネリスト] 沖啓介(メディア・アーティスト、東京造形大学特任教授) / 斉藤綾子(映画研究者、明治学院大学教授) / レオナルド・バルトロメウス(山口情報芸術センター[YCAM]、Gudskul Ekosistemキュレーター) / メー・アーダードン・インカワニット(映画・メディア研究者、キュレーター、ウェストミンスター大学教授)

[モデレーター]

田坂博子(恵比寿映像祭キュレーター、東京都写真美術館学芸員)

日仏会館共催企画
シンポジウム

テクノロジー？－日本とフランスのメディア・アート

映像に関わる、写真、テアトル・オブティーク(光の劇場)、映画などはフランスで発明されたものでした。今回は「テクノロジー？」をテーマに、19世紀の歴史から現代に至るメディア・アートの変容について幅広く考察していきます。改めて映像の歴史を振り返りながら、メディア・アートにおいて、どのように新しいテクノロジー(技術)が利用されてきたのか、現代における日仏のアーティストの実例も紹介しながら、技術の受容と発展について議論します。[日本語のみ]

[日時] 2023年2月16日(木) 18:00-20:00

[会場] 日仏会館ホール(定員70名)

[パネリスト] 畠中実(NTTインターコミュニケーション・センター[ICC]キュレーター) / サンソン・シルヴァン(フランス大使館 文化担当官、アンスティチュ・フランセ日本 芸術部門 統括マネージャー)

[モデレーター] 藤原邦一(日仏会館 学術・文化事業委員会委員) / 藤村里美(恵比寿映像祭キュレーター、東京都写真美術館学芸員)

スペシャルトーク
セッション

環を成す／球を成す－《FORMING SPHERES》YEBIZO MEETS 地域連携：オフサイト展示

東京2020オリンピックの開会式では、ドローンにより球体状の組市松紋様が空中に浮かぶピクセル映像として60秒間表現されました。恵比寿映像祭では、この組市松紋様の球体が恵比寿ガーデンプレイスセンター広場で、光と影による新たなインスタレーションとなります。本トークでは、作家陣を招き、このインスタレーションの考え方・つくり方について語ってもらいます。

[日時] 2023年2月3日(金) 15:00-17:00

[会場] 東京都写真美術館1Fホール(定員190名)

[スピーカー] 野老朝雄(美術家) / 平本知樹(空間デザイナー、建築家)

[モデレーター] 関昭郎(本プロジェクトキュレーター、東京都写真美術館学芸員)

スペシャルトーク
セッション

カメラの自動化による創造のパラダイムシフト－オートメイテッド・フォトグラフィを参照点として YEBIZO MEETS 地域連携：コラボレーション展示

コラボレーション展示として実現した「オートメイテッド・フォトグラフィ」のプロジェクトは、ECAL/ローザンヌ美術大学が機械学習や写真測量による画像生成、CGI(自動プログラム生成)などの技術と表現の相関関係について、批評的な見解とともに表現の可能性について試みたものです。本プロジェクトに参加したECALのクレマン・ランブレ氏よりそれぞれの解釈について詳しくお聞きするとともに、自動化されたコンピューターヴィジョンの間に生まれるさまざまな創造性についてゲストと共に議論します。[日英逐次通訳付]

[日時] 2023年2月5日(日) 11:00-13:00

[会場] 東京都写真美術館1Fホール(定員190名)

[スピーカー] クレマン・ランブレ(ビジュアルアーティスト、ECALアーティストティック補佐) / 小山泰介(写真家、TOKYO PHOTOGRAPHIC RESEARCH PROJECT代表) / 齋藤精一(パノラマティクス主宰、作家、クリエイティブディレクター、Vitality.Swissプログラムアンバサダー)

[モデレーター] ジョナス・ブルヴァ(在日スイス大使館 広報・文化部長)

1：「やさしい日本語」による恵比寿映像祭ガイド

日本在住または日本語勉強中の外国人の方にも、わかりやすい日本語表現で、恵比寿映像祭2023の見どころをご紹介します。印刷物を配布するほか、ウェブサイトでも見る事ができます。恵比寿映像祭が初めての方の、鑑賞を深める入門としてもおすすめです。

[配布場所] 東京都写真美術館 1Fロビー チラシラックほか
恵比寿映像祭ホームページ

2：恵比寿映像祭2023 見どころトーク (オンラインプログラム)

恵比寿映像祭2023の概要や代表的な展示作品、見どころなどを、映像祭スタッフのナビゲートでご紹介します。オンライン開催なので、外出が困難な方、地方や海外在住の方も参加することが可能です。東京都写真美術館や映像祭にまだいらしたことがない方も、ぜひご参加ください。

[出演者] 恵比寿映像祭エディター、キュレーター、
出品作家ほか(予定)

[日時] 2023年2月1日(水)、3日(金)、8日(水)、15日(水)
各日19:00-

[会場] オンライン(YouTubeライブ配信)

[対象] どなたでも(日本語での実施)

3：インクルーシブ・プログラム

恵比寿映像祭2023について、みんなで話そう！
(手話通訳付き／オンラインプログラム／事前申込制)

恵比寿映像祭2023の概要や主な展示作品を、映像祭スタッフのナビゲートで紹介した後、参加者も交えて会話を広げていきます。みんなで映像祭について話しましょう！映像祭をご覧になった方も、これからご覧になるという方も歓迎です。複数の視点が集まることで、新しい見方や発見があるかもしれません。障害の有無に関わらず、どなたでもご参加いただけます。手話通訳付きのため、手話を母語とする方も安心してご参加ください。

[出演者] 恵比寿映像祭スタッフ、手話通訳者

[日時] 2023年2月9日(木)19:00-20:30

[会場] オンライン(Zoom)

[対象] どなたでも

[定員] 10名程度 ※事前申込制 応募者多数の場合は抽選

[申込方法] メールにて申込み。詳細は東京都写真美術館ホームページをご覧ください。

4：恵比寿映像祭を星占いでガイダンス

占星術で導き出した各星座の特性をもとに、星座ごとのおすすめの作品をご紹介します。思いがけなく結ばれる作品との縁が、より深い鑑賞体験へ誘います。どの作品から鑑賞すればよいかわからないという方や、すべての作品を鑑賞するには時間が足りないという方は、星の導きを手がかりに映像祭をめぐってみてはいかがでしょうか。

[占星術] 鏡リュウジ(占星術研究家)

[配布場所] 東京都写真美術館各階ロビー チラシラックにて配布のほか、恵比寿映像祭ホームページでも一部ご紹介します

5：TOPボランティアによる アニメーションオープンワークショップ

東京都写真美術館のボランティアによる、アニメーションのワークショップです。アニメーションの原理に触れながら、当館オリジナルのキットを用い、世界にひとつのおどろき盤を手作りします。予約は不要です。短い時間で完成させることができますので、上映の待ち時間などにも気軽に立ち寄りください。

[スタッフ] 東京都写真美術館 ボランティア

[日時] 2023年2月5日(日)、11日(土)、18日(土)
各日13:00-17:00

[会場] 東京都写真美術館 1Fスタジオ

[参加費] 無料 ※予約不要

[対象] どなたでも

[定員] 各日50名



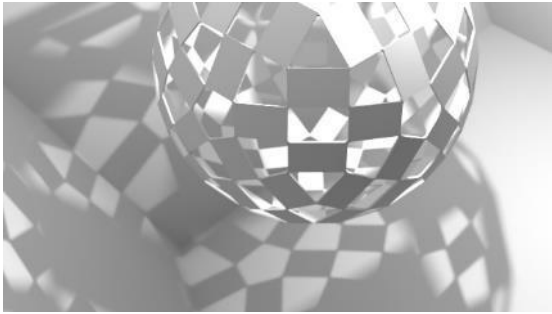
(左) [参考画像]2021年度の配信(写真左・パンタグラフ [出品作家])

(中) [参考画像]ボランティアによるアニメーションオープンワークショップ(2022年)の様子

(右) 鏡リュウジ(占星術研究家)

野老朝雄、平本知樹、井口皓太

オフサイト展示



東京2020オリンピック競技大会の開会式で、ドローンにより球体状の組市松紋様が空中に浮かぶピクセル映像として60秒間表現されたことは、多くの人の記憶に残っています。本プロジェクトは、このドローン演出における組市松紋様球体を彫刻化し、光を投影することでその光と影による新たなインスタレーションとして再構築するものです。

開会式のドローン演出を手がけたメンバーである、エンブレムをデザインした野老朝雄、デジタル・ファブリケーションの技術を使って廃プラスチックを材料として表彰台を制作した平本知樹、そして「動くスポーツピクトグラム」をデザインした井口皓太が協働し、変化に富んだインスタレーションを発表いたします。

野老朝雄、平本知樹、井口皓太 《FORMING SPHERES》
2023年 [参考図版]



(左から)野老朝雄、平本知樹、井口皓太

[日時] 2023年2月3日(金)- 2月19日(日) 10:00-20:00

*最終日は18:00まで

[会場] 恵比寿ガーデンプレイス センター広場

[料金] 無料

[休日] 2月6日(月)、13日(月)

▶関連トークが開催されます。詳細はP20

※本作品は、2022年10月23日に渋谷東武ホテル地下2階にオープンしたシビック・クリエイティブ・ベース東京 [CCBT] の「アート・インキュベーション・プログラム」のアーティスト・フェロー活動の一環として制作されます。

CIVIC
CREATIVE
BASE
TOKYO
シビック・クリエイティブ・ベース東京

Automated-Photography

オートメイテッド・フォトグラフィ

コラボレーション展示



《See me in Depth》2019年 ©ECAL/Gohan Keller

écal

Schweizerische Eidgenossenschaft
Confédération suisse
Confederazione Svizzera
Confederaziun svizra
Embassy of Switzerland in Japan
スイス大使館

MFJ
日 仏 会 館

人の介入が徐々に排除され、機械が機械のために自動的に生み出す画像が増えていきます。本展では、ECAL/ローザンヌ美術大学の写真修士課程の学生がとらえたこの状況を、没入型の音響とヴィジュアル構成で展開。自動写真撮影の美的・概念の可能性を探る批評的見解をよりすぐりの作品とともに提示します。会期中は、関連イベントとしてスペシャルトークセッションも開催。

[日時] 2023年2月3日(金)- 2月19日(日) 10:00-20:00 ●

[会場] 日仏会館ギャラリー

(東京都渋谷区恵比寿 3-9-25)

[料金] 無料

[休日] 月

[問い合わせ] 03-5449-8437(在日スイス大使館 広報文化部)

[HP] <https://automated-photography.ch/> <https://vitality.swiss/jp>

▶関連トークが開催されます。詳細はP20

※スイス大使館が手掛ける、2025年に開催される大阪・関西万博に向けたコミュニケーション・プログラム「『Vitality.Swiss』ーゆたかな未来って?」は、ヘルシーライフ、持続可能な地球、人間中心のイノベーションの3つのテーマを柱に展開中。本展示は、「Vitality.Swiss」の一環として参加しています。

Vitality
Swiss

1. (公財)日仏会館 ●



映像と講演 ここだけのフランス映画V
ミシェル・ゴンドリー監督『ムード・インディゴ』

[日時] 2023年2月10日(金)18:30-21:00
[会場] 日仏会館ホール [住所] 渋谷区恵比寿3-9-25
[料金] 一般1,000円、学生500円(要事前申込/70席)
※申込方法は後日Webにて公開
[主催] 公益財団法人日仏会館 / TMF日仏メディア交流協会
[協力] ハピネットファントム・スタジオ
[HP] mfmtokyo.or.jp

2. YEBISU GARDEN CINEMA



リー・ルイジュン監督『小さき麦の花』

[日時] 2023年2月10日(金)- 公開予定
[住所] 渋谷区恵比寿4-20-2 恵比寿ガーデンプレイス内
[料金] 大人1,900円、大学生1,500円、高中小学生1,000円、
シニア1,200円、プライベートシート2,100円
[休日] なし
[HP] unitedcinemas.jp/ygc

3. MA2Gallery

M A 2 Gallery

小瀬村真美 Before the Beginning

[日時] 2023年2月3日(金)- 3月4日(土)13:00-18:00
[住所] 渋谷区恵比寿3-3-8
[料金] 無料
[休日] 日・月・祝日(火曜は事前メールアポイント制)
[HP] ma2gallery.com

4. 工房親 ●



Anais-Karenin: Mediate Plants

[日時] 2023年2月1日(水)- 2月24日(金)
水-土 12:00-19:00 日祝 12:00 -18:00 (最終日は-17:00)
[住所] 渋谷区恵比寿 2-21-3
[料金] 無料
[休日] 月・火
[HP] kobochika.com

5. MuCuL



みかがみ 佐藤慶子

[日時] 2023年2月3日(金)- 2月19日(日) 13:30-18:30
[住所] 渋谷区恵比寿2-21-3
[料金] 無料
[休日] 月・火
[HP] e-mucul.com

6. NADiff a/p/a/r/t

NADiff a/p/a/r/t

NADiff Window Gallery vol.87 シシヤマザキ 店内展示

[日時] 2023年2月2日(木) - 2月26日(日) 13:00-19:00
[住所] 渋谷区恵比寿1-18-4 NADiff A/P/A/R/T 1F
[料金] 無料
[休日] 月・火・水(祝日の場合は営業)
[HP] nadiff.com

7. MEM

MEM

金村修展 Can I HELP ME ?

[日時] 2023年2月2日(木)- 2月26日(日) 13:00-19:00
[住所] 渋谷区恵比寿1-18-4 NADiff A/P/A/R/T 3F
[料金] 無料
[休日] 月
[HP] mem-inc.jp

8. AL



Law-technology? High-quality!
Yoshihiko Satoh, MEGANE, Yuko Mohri

[日時] 2023年2月2日(木)- 2月12日(日)
11:00-19:00(最終日は18:00まで)
[住所] 渋谷区恵比寿南3-7-17
[料金] 500円
[休日] なし
[企画] TRAUMARIS 住吉智恵
[HP] al-tokyo.jp

9. ART FRONT GALLERY ●



ディストピア：記憶の変遷

[日時] 2023年2月3日(金)- 3月5日(日)
水-金 12:00-19:00、土日祝 11:00-17:00
[住所] 渋谷区猿楽町29-18 ヒルサイドテラス A棟1F
[料金] 無料
[休日] 月・火
[HP] artfrontgallery.com

10. N&A Art SIT ●

N&A Art SITE

タイジ・テラサキ
Paradise Reborn: Rewilding Palmyra
―楽園の再生：パルミラ環礁の再自然化―

[日時] 2023年2月3日(金)- 2月19日(日)12:00-17:30
[住所] 目黒区上目黒1-11-6
[料金] 無料
[休日] 日・月
[HP] nanjo.com

11. POETIC SCAPE

POETIC SCAPE

12. 景丘の家



兼子裕代 APPEARANCE

Ponboks 浮遊地下室での光あそび

[日時] 2023年2月3日(金)-2月19日(日) 13:00-19:00
 [住所] 目黒区中目黒4-4-10 1F
 [料金] 無料
 [休日] 月・火
 [HP] poetic-scape.com

[日時] 2023年2月1日(水)-2月28日(火)
 火-金 11:00-18:00、土日祝 10:00-17:00
 [住所] 渋谷区恵比寿4-5-15
 [料金] 無料
 [休日] 月・2月12日(日)
 [HP] kageoka.com/20230201/

13. まなび場、恵比寿

YEBISU GARDEN PLACE



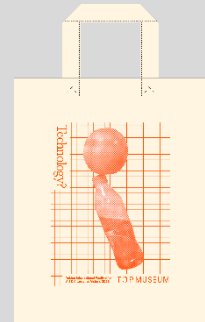
アートと共にある暮らし ～映像アートの祭典 | 恵比寿映像祭をめぐってみよう

[日時] 2023年2月4日(土) 14:00-15:30
 [周遊プラン] 東京都写真美術館の東ルート会場をめぐり
 [定員] 10名程度、追ってHPで募集いたします
 [パートナー] サッポロ不動産開発株式会社、ArtSticker
 [HP] yebizo.com/jp/program/1501

フェスティバルを楽しむプログラム

「Technology？」をめぐりシールラリーを開催

恵比寿地域および近隣で開催される「YEBIZO MEETS 地域連携プログラム」の会場をめぐって、シールを集めながら映像祭を体験するシールラリーを開催します。3か所のシールを集めた方には、記念品のオリジナルトートバッグをプレゼントします。



(参考) 第14回恵比寿映像祭「スペクタクル後」
図書室閲覧コーナーの様子

恵比寿映像祭関連書籍が充実

東京都写真美術館4F図書室では、恵比寿映像祭2023の出品作家や上映プログラムの関連図書やカタログなど、恵比寿映像祭をより深く楽しむための書籍を多数ご用意。どなたもご自由に閲覧いただけます。また、2Fミュージアム・ショップ「NADiff BAITEN(ナディッフ バイテン)」では、関連書籍やDVD、グッズを販売します。鑑賞の合間にぜひお立ち寄りください。

「恵比寿映像祭コラボメニュー」のご提供

東京都写真美術館1Fカフェ「FROM TOP」でコラボメニューが登場します。

恵比寿映像祭2023のメインビジュアルに出てくるオレンジから着想を得たメニューを提供します。映像祭の来場記念にどうぞお召し上がりください。



(参考)第14回恵比寿映像祭「スペクタクル後」コラボメニュー

コミッション・プロジェクト

荒木悠
葉山嶺
金仁淑
大木裕之

テーマ展示(2F)

ルー・ヤン
Houxo QUE
細倉真弓
越田乃梨子
カール・シムズほか

テーマ展示(B1F)

梅沢英樹+佐藤浩一
築地仁
実験工房
北代省三
エメット・ゴーウィン
ロール・アルバン=ギョー
杉浦邦恵
エンネ・ピアマン
山沢栄子
フィオナ・タン

上映プログラム

ジョナス・メカス
ストーム・デ・ハーシュ
ギデオン・バックマン
マリー・メンケン
イネサ・ブラシスケ
ルーカス・ブラシスキス
ベギー・アーウィッシュ
井上絵美子
中西香南子
飯村隆彦
瀧健太郎
河井政之
足立アン
井口奈己
金井久美子
金井美恵子
牧原依里
雫境(DAKEI)
深川勝三
八幡亜樹
おおだてのぶひろ
最後の手段
磯部真也
にいやなおゆき
ローヤ・サリミ
木原正天
崎村宙央
大柴拓
ムン・スジン
フェイ・ハー
ウィン・ヤン・リリアン・フー
許煒
西野朝来
金子勲矩
ウー・チー・ヂオン&ステップシー

ライブ・イベント(soda)

田中和人
青木真梨子
青木陵子
青崎伸孝
秋吉風人
麻生晋佑
荒川医
岩崎拓也
イッタ・ヨダ
伊藤存
江口悟
岡田理
片岡純也+岩竹理恵
金村修
KAYA(デボ・アイラース+
ケルスティン・プレチュ)
窪田隆之
COBRA
小松浩子
佐藤純也
アーロン・ジェット
庄司朝美
高橋耕平
たちばなひろし
玉山拓郎
ナヴィッド・ヌール
花代+斎藤玲児
甫木元空
増本泰斗
サトミ・マツザキ
間部百合
南川史門
森田浩彰

シンポジウム

沖啓介
斉藤綾子
レオナルド・バルトロメウス
メー・アーダードン・インカワニット
畠中実
サンソン・シルヴァン
藤原邦一

スペシャル・トークセッション

野老朝雄
平本知樹
クレマン・ランブレ
小山泰介
齋藤精一
ジョナス・プルヴァ

YEBIZO MEETS オフサイト展示

(野老朝雄)
(平本知樹)
井口皓太

YEBIZO MEETS コラボレーション展示

(アン・クリスティン・ベルトラン)
(クレマン・ランブレ)
(ジョナス・プルヴァ)

YEBIZO MEETS 地域連携プログラム

ミシェル・ゴンドリー
リー・ルイジュン
小瀬村真美
アナイ・カレニン
佐藤慶子
シシヤマザキ
金村修
佐藤好彦
MEGANE
毛利悠子
ムニール・ファトゥミ
釘町彰
ジャンナ・カディロワ
エカテリーナ・ムロムツェワ
藤堂
元田久治
富安由真
カネコタカナオ
エコ・ヌグロホ
タイジ・テラサキ
兼子裕代
Ponboks

※ () は、2つのプログラムに参加

合計122組
(2023年1月12日現在)

料金／チケット情報

料金：無料

※一部(上映など)のプログラムは有料

※東京都写真美術館の展示をご鑑賞の際は、オンラインにより日時指定予約を推奨いたします。(日時指定予約は2023年1月20日(金)午前0時から開始します)

有料プログラム

○上映(東京都写真美術館1Fホール)

料金：800円(前売)／1,000円(当日)

○スペシャル上映：

ジョナス・メカスー3章のフィルム・プログラム(東京都写真美術館1Fホール)

料金：1,500円(前売)／1,800円(当日)

※前売券の販売は2023年1月20日(金)午前0時から開始します。

※当日券は東京都写真美術館 1Fホールで各日10時より販売いたします。

恵比寿映像祭プレスお問い合わせ ※ 報道・媒体関係者様のお問い合わせに限らせていただきます

プレスリリース／広報用画像／ご取材に関するお問い合わせ

恵比寿映像祭広報担当(共同ピーアール株式会社)：田中(たなか)、安田(やすだ)

TEL：03-6264-2382／FAX：03-6700-5620／E-mail：yebizo2023-pr@kyodo-pr.co.jp

携帯：080-8866-6183(田中)、090-7909-5164(安田)

※本リリース内で使用している写真を広報用画像としてご用意しています。

広報用図版申請フォーム：<https://taylori.com/f/yebizo2023/>

より申請をいただくか、

①ご所属 ②貴媒体名 ③掲載予定時期 ④ご希望画像の作家・作品名などを記入のうえ、上記のプレス担当者までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

* 図版をご掲載の際は、必ず作品キャプション及びクレジットの表記をお願いします。

* 図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

※諸般の事情により、開館時期・内容等を変更する場合がございます。

展覧会等の詳細、最新の情報は映像祭ホームページをご確認ください。

恵比寿映像祭公式ホームページ：<https://www.yebizo.com>

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

TEL：03-3280-0099 / FAX：03-3280-0033